

この声の固さに、鋭く軍人の目に戻った。

近頃やっと覚えた探索のスキルをフェリシアが発動させた！

ヤバイ！ヤバイ！

スキルに反応があった。大きい！何かは判らない！アタシたちの跡をつけている？！

この森の深度にいる大きさのモンスでは無い！

それだけは判った。

後ろを振り返った。森の木々の葉が遮ってて視認出来ない。

近場の木によじ登った！下からガリアニア公がお尻を押し上げてくれた。背が高いから一気にからが上に！ありがとうっ。触りたかっただけ？

太い枝の上に立ち、高場で遠くまで見通す。スキルの反応はこの方角のはず！

見えたのは最悪だった。最悪が見えてしまった。

毛の長い猿。しかも巨大な二足歩行の猿。

マンイーターエイプ。

なぜかこの距離なのに。

こつちから見ていることに気付いた。視線が合った。

その汚れた顔が、にたありとヒトによく似た、いやらしい笑みを浮かべた。

ざっ、と飛び降りて、叫んだ。

「こつちっ！走りますっ！」

それだけ言っただけいきなり走り出したのにガリアニア公は、それより一步先に走り出していた。

「なにか。状況報告を」

低く固い声。緩んだところの一切ない、引き締まった声。

「巨大モンスです。マンイーターエイプ。ここいらには居るはずがないと思ってました。通常はもつと森の奥深くに」

「名からして人喰いか？」

「……ええ。大好物です。好んで襲いかかってきます」

「では……街から離さんとな」

その通りだ。そして、それは……アタシたちだけでさらに森の奥に侵入してしまう、と言うことを意味している。

二人して森の奥へと走り抜けていく。

フェリシアには後ろを振り返る勇氣は……今はまだなかった。

バカ長い腕も使った走りでも移動も速かったはず！ 嗅覚に優れていたはず！ アタシたちの匂いはもう覚えられているはず！

「誰か！他の冒険者と出会えれば！アタシたちだけでは無理！」

走りながらそれだけを叫ぶ！

少し荒く息は乱れていたが、公爵が必死で付いて来ている。まだ、そう体力が付いてきているというわけでもない。歳も歳だ。いずれすぐに限界は来てしまう。

どうしよう！ どうしよう！

何がフェリシア先生よっ！ 生徒も守れないでっ！

二人の足が止まった。止めざるをえなかった。

崖が眼前にあり、地が途絶えていた。

崖際に沿って走る！ 曲がった分だけ。

追っ手が背に迫った！

ウキヤアキヤキヤキヤ……と甲高く鋭い猿の鳴き声。

頭に刺さってきそうなほど鋭く！間近だ！

ふつと振り返る。その真つ黒い影はいた。黒い毛をみっしり生やし、喉元だけ欠けた月のように半円月に白い。口元だけ白い。そういう丸い口髭を生やしたお爺さんのようだ。

そういう髭を生やした身の丈二メートル以上の狂った年寄りのような猿。

人喰いの巨大猿。目が嬉しそうにいたり、と歪んだ。

猿だけに表情が人に似ている。それが堪らなく嫌悪だ。

どこまで通用するか判らないが。

フェリシアは腕を交差させ、腰の双刀をすらり、と抜いた。

隣で荒いガリアニア公の息の音が聞こえる。

ガリアニア公も、少しフェリシアと離れ、すつ、と剣を抜いた。

ウキヤキャア！と、その長い真つ黒な腕を伸ばしてくる！

双刀を重ねて！全力で！その腕を弾く！僅かにも刃は食い込まない！

もう一つの手が伸びてくる！返しが間に合わない！

辛うじて身を振り躲した。どすり、と公の胸にぶつかった。

ガリアニア公が、そのフェリシアのからだごと引いて、マンイーターエイプから距離を取る。

「女好きか。この猿は」

「おんなの方が美味しいのよ。きつと」

「その点は同意出来そうじゃな。走り逃げ切るのは無理。膂力は足らん。二人合わせても足らん。そうじゃな」

「……そうね」

「弱点は……？」

「……特になし。倒すには……より強くないと」

「ふむ」

短い言葉の中に絶望の気配はなかった。焦りの気配も。

ただ、深い思索の気配と、鋭い視線だけがあった。

マンイーターエイプはもう、急いではいなかった。もう、獲物は目前にいるのだ。

腕の届くところに。ウマそうなメスのヒトザルが。

あの枯れ木のようなオスはどうでもいい。強さを感じない。ウマそうでもない。

むしろマズそうだ。

実って実って枝からぼとりと。自然に落ちたような果実がそこころりと転がっている。なんか持つてるが意味はない。あとは掴んで齧り付くだけだ。

果汁が口に溢れるように。

鮮血が口の中いっぱいに溢れ！ 甲高い悲鳴が心地よく響き渡るだろう。

それがどれだけウマイか！

マンイーターエイプの口中によだれが溢れた。

にたりと形を変える口から、だらだらと滴り落ちた。

じりじりと二人して剣を構え、下がっていく。

ふと気付くとガリアニア公が足を止めていた。フェリシアだけが下がり、公が一歩前に。

「フェリシア一人なら逃げ切れるかの？ 一の策はある。成功確率50%というところじゃがな」

「出来るわけないでしょっ！」

その語気の荒さに、小さくガリアニア公は驚いた。

どんな過去に照らしても耳に覚えのない激しさ。厳しさ。

冒険者の声だった。

マンイーターエイプの両腕が同時に掴み掛かる！

フェリシアがまた一歩出て！

辛うじて片腕は双剣両刀で反らす！ もう片腕はガリアニア公がうまく避けた。

引き腕にフェリシアを掴み取ろうと！

あっ、と思つてフェリシアの身が固まる！

その固まったからだ！ ガリアニア公に引かれ！ ぎりぎりでその汚い指を逃れた。

ヒトとよく似ている手だ。真っ黒に汚れていた。

二人ごと、後ろに跳んだため……草むらにごろりと転げた。

素早く立ち上がる。剣先も逸らさない。構え直す。

引き寄せるために胴に回されたガリアニア公の長い腕が外れていく。

二人して並んで、剣先で牽制しながら下がっていく。

が、それもすぐ終わった。崖の先端に来ていた。四方の内二つが崖となった。

その他の二方のだ真ん中には、化け物猿がいる。ヒトの肉が好物な。

遙かに高いところに頭のある……ばかでかい猿が。

フェリシアでは双刀の剣ですら辛うじて届かない高みに……にたりと余裕綽々の笑みを浮かべた顔がある。狂った目が爛々と光っている。

長い腕はヒトの倍以上はあるだろう。その腕力は三倍四倍でも効かないかも知れない。

フェリシアの胸に絶望が僅かに差した。覚悟を決めるときが来た、と悟る。生きたまま喰われるよりかは……潔く飛び降りる。

0. 1%の生存確率を選ぶ。

0. 1%は高く見積もりすぎかも知れないが。

公爵サマは……？

フェリシアが身体を離し、強張った肩をふっと下げ、ぐっと胸を張った。

それが何か。軍人のガリアニア公には判った。底が入った、と軍では評する。

絶死の状況。最悪の中の最悪。で、ぐっと、兵には底が入る。

死が見えた。己の最低の最悪の最後が見えた。

で、どうする。

胸を張る。戦いの賛歌を歌い上げる。呐喊の気に漲る。

それだけが唯一の生存の道なのだと。

悪しき状況を切り抜けて！ 生還へ繋がる細い細い糸をたぐり寄せる、唯一の術

なのだと！

いまぞ鳴り響け！戦場音楽よ！ 勇者の証を讃え！力強く奏でよ！

崖上に、突風が吹き抜ける。

フェリシアの髪をふわりと靡かせ、それははためく。

隘路に追い詰められてさえ、なお気高く。なお美しく。

反攻の軍旗のようにその髪は風に靡く。高らかに闘気を謡う。清々と謡う。

軍神の娘か。このおんなは。

ふふっ。良きおんなよ。改めて改めて！惚れ直すわい！

「では倒すしかあるまいな。一分しのげるかの？」

一瞬で分析する。辺りを見回し立案。背の高い樹木。枝はいずれも手が届かぬ程遙か高い。岩がちの崖。凶太い幹に這うツタ。空を覆う枝葉。崖際まであと範囲

五メートル。それ以上は逃れること能わず。絶体絶命。

だが、ガリアニア公の目に絶望の気配は微塵もない。

ふっ、とフェリシアの隣を外れ、すつとその手の剣を振りかざした！

「おお神剣グウズニクよ！ お力を！」

巨大な木の根元を一刀でなぎ倒す！ 一刀両断！

大樹が小枝のように根元を切り払われ！それが斜めにずん、と倒れる！

驚きに目を見開くフェリシアに鋭い指示が飛ぶ！

「フェリシア！ あの赤いワビト草の花の群生が見えるか？ 崖際のだ。あそこに立ち、ヤツを引き寄せよ。すんでで躲して、背に回れ！」

それだけを言い残して、斜めに倒れた巨木の上をガリアニア公が駆け上がっていく！

意味の総ては判らない。だが勝機がそこにあると。

あのガリアニア公爵、軍人のガリアニア公がそう言っている！

指示はすつとフェリシアの中に入った。

フェリシアがその目印の花の所にずると後退し、マンイーターエイプと対峙する。もうそこは崖際ぎりぎりだった。

ずしり、ずしり、と寄ってくる。黒き重き死の影が。

猿なりに知恵のあるマンイーターエイプはもう確信していた。

もう追い詰めた、と。あとは崖下に落とさぬよう、慎重に掴むだけ。

崖下に落ちて死んでから喰うのと、生きたままかぶりつくのとは味が違う。

猿なりに判っていた。

冷えた死体と熱く噴き出す生き血の味の違いを。

両手で同時に掴み掛かるように！ 懐深く引き寄せるように！

巨猿が両腕を伸ばしてくる！

そのバカ長い腕の動きをフェリシアが両剣で受け！受けきることは出来ず押し切られ！だが、辛うじて勢いを減じさせた！ その下を潜るように背に回る！ 片

手の剣は猿の豪腕の勢いに弾かれ！押され！手放し、落としてしまった！
脚に残る力の総てを使い！前方に跳び！草むらに転がった！
懸命に起き上がり向き直る。

その目の端に何かが映った。

ガリアニア公がツタの縄に捕まり、ぶうん、と降りてくる！

「おおおお！」

縮込めていた脚をぐんつ！と突き出し！

マンイーターエイプの肩先を勢いそのままに蹴り飛ばした！

巨猿とは身体の質量が違う。ガリアニア公は瘦身だ。だがしかし。

振り子の勢いが乗っていた。一番の下死点に猿はいた。

不意を突いていた。

さしもの巨体も蹴り飛ばされて、ギャギャア！とたたらを踏む。が、その指の長い脚がぐつ、と踏ん張る！

崖に蹴り落とすまでには行かない！

高い所から降りてきた勢いも総て使い果たし、ガリアニア公がよろけて草むらに落ちた。落ちたが素早く転がった！その転がりの内に。

腰だめの剣を抜いていた。

短く振りかぶり、斜め打ちにその黒毛むくじやらの脚を払う！

断ち落とせはしない！が、鮮血が小さくしぶいた！

グギャー！と短く叫び！その斬られた片足を上げた！

そのクソ重い体重が、もう片側の脚にかかった。崖際についていた脚に。その足下がぼろり、と崩れた。

黒い巨大な身体がゆっくり傾いていく。何故かゆっくりに見えた。

崖上から見える、何もない空に消えていく。

ギャギャアア！とその空を裂くように猿猴が聞こえる。

必死に空中に斜める身体を戻し！崖際にその長い腕を伸ばした。

黒い影が総て消えた。

崖際に指だけが残っていた。五本の指だけが。ぐつと力が籠もり！食い込ません

ばかりに！

どこからかギヤアアツツと、呻く声がある。

その指にさらに！ぐぐつ！と力が籠もったとき！

その指先の食い込んでいた土がぼろり、と崩れた。

ギイイイイ……と遠ざかる猿猴を残し、がんごん、と岩が打ち鳴らされ、転げ落ちる音がし……。

何もかも……総ての音が空に吸い込まれていったかのように。

僅かな間の後……崖上の空は静寂を取り戻した。